

# ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係

早川孝子・依田 明

The relationship between two siblings.\*

Takako HAYAKAWA\*\* & Akira YODA\*\*\*

## Summary

The purpose of this study was to examine and replicate the findings by Yoda (1965) on the relationships between two siblings.

The subjects were 161 children in either the fifth or the sixth grade. The subjects were asked to make a story about each of seven pictures which was shown to them. The changes of sibling relationship were analyzed through the comparison of the results between the Yoda's and the present study.

The main results were as follows;

(1) The opposition and the dominance between siblings decreased, but the harmony and the detachment respectively increased.

(2) We could scarcely find differences in sibling relationship among eight types which were classified in terms of birth order and sex.

(3) Although the opposition between siblings was salient in the results by Yoda (1965), the harmony was most salient in the present investigation.

## 1. 目 的

われわれの社会は、人間関係が複雑にからみあった網のようなものである。その社会の中でわれわれは、他人とのあいだに良好な人間関係をつくりながら適応していかなければならない。成長過程における基本的な人間関係と考えられているのは、親子関係、きょうだい関係、友人関係である。このうち、親子関係は「たて」の関係であるのに対して、友人関係は「よこ」の関係であり、両者は異質である面が多い。きょうだい関係は、親子関係にみられる「たて」の関係と、友人関係にみられる「よこ」の関係とがくみあわされているといえることができる。親子関係と友人関係のあいだに両方の人間関係の性質をあわせもったきょうだい関係があれば、親子関係から友人関係への移行もスムーズにおこなわれる。幼少時から家族内で多種類の人間関係を体験していることは、成長後の社会への適応に有利に作用すると予想され、きょうだい関係は人格形成に大きな影響を与えていると

\* 本研究は文部省科学研究費補助金（課題番号 563100200 「親和欲求に関する総合的研究」 研究代表者 詫摩武俊）の交付を受けた。

\*\* 東京都立大学大学院（Tokyo Metropolitan Univ.）

\*\*\* 心理学教室（Dept. of Psychology）

いえよう。

このような意味をもつきょうだい関係について、実証的研究を行なったものに、依田〔1965〕の調査\*がある。この調査の目的は、きょうだいの性構成、出生順位、きょうだい間の年齢間隔が、きょうだい関係の認知に及ぼす影響について検討することであった。

調査対象は、小学校4年生から中学校2年生までの児童・生徒で、ふたりきょうだいであるものとした。しかも、きょうだいは、ふたりとも小学校4年から中学2年までに在学し、ともに調査の対象となった。このようなきょうだい53組、106人を選んだ。

調査は、依田の考案した図版を用いて、TAT法により集団的に施行した。そして、作成された物語を、対立関係、調和関係、専制関係、分離関係の4つに分類し、4分類のそれぞれが占める割合を検討した。

この1965年調査の主要な結果は、次のようにまとめられる。

- (1) 全体としてみると、対立関係が多く、きょうだい関係の基底には、対立関係があると考えられる。
- (2) 男子は女子よりも対立的であり、女子は男子よりも調和的である。
- (3) 長子は次子よりも専制的であり、次子は長子よりも分離的である。
- (4) きょうだい間の年齢間隔がせまいと、長子は、次子よりも対立的であって、調和的でない。

以上のようなことから、出生順位の違いによる生育環境の相違や、きょうだいに関する我国独自の文化が、きょうだい関係に影響を及ぼすと考えられた。

この1965年調査からすでに15年以上の年月が経過している。この間に我国のきょうだい様相は大きく変化した。家族形態の核家族化が進み、生まれてくる子どもの数が減っている。すなわち、一家族あたりの子どもの数が減少している。一家族あたりの子どもの数が減少したことは、きょうだい数の減少を意味する。現代は、ふたりきょうだい、またはひとりっ子である者が大半を占めるようになった。また、家族内での身分上の伝統的序列性も大幅に弱められてきている。家族制度的な考え方は後退し、家族内の対人関係の民主化が進んでいるともいえよう。

本研究では、きょうだい関係の認知についての1965年調査とほぼ同じ形で調査を行なう。そして、1965年調査結果と本調査結果とを比較し、年代的变化を検討しながらきょうだい関係について考察する。

## 2. 方 法

### 1) 調査対象

東京都内の区立小学校5年生、6年生の児童161名（男子77名、女子84名）。調査対象となった児童は、次の条件をみたしていた。

- (1) ふたりきょうだいであること。
- (2) 本人のきょうだいは、幼稚園（保育園）から高等学校までに在園または在学して

\* 以下1965年調査とする。

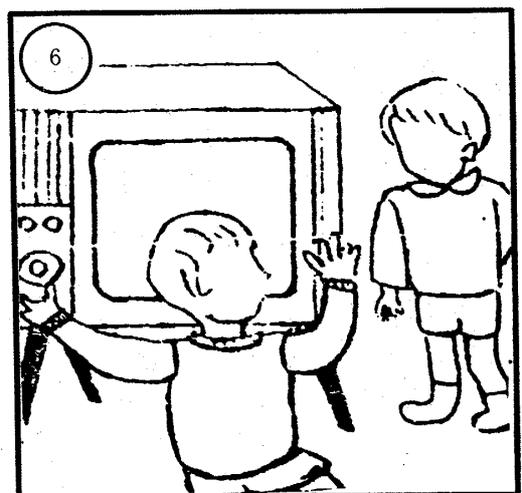
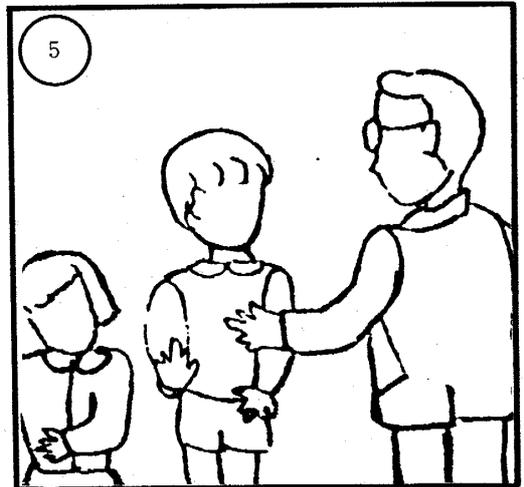
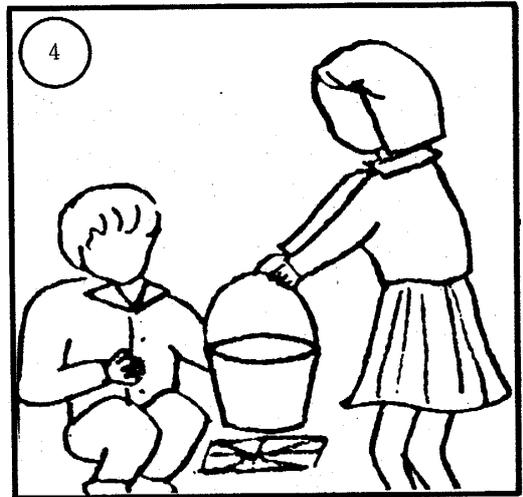
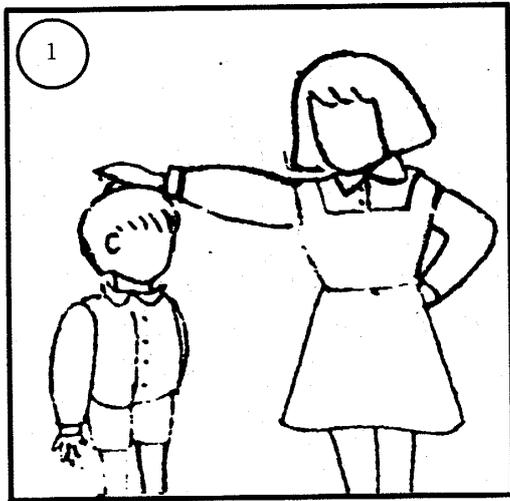


Fig 1. 調査に用いた図版

いること。

## 2) 調査表

調査は、1965年調査で用いられたものと等しい Fig. 1 に示した7枚の図版を用いて、TAT法により施行した。調査表には、2人の子どもの登場する日常生活場面の図版6枚 (Fig. 1 参照) と、白紙の図版1枚、計7枚の図版が示されている。物語作成に入る前の教示は次のようなものであった。

「これから空想力のけんさをします。次の絵をみて、あなたのすきなお話しを作ってください。どういうお話しがまちがっているとか、正しいとかは、まったくありませんから、思ったとおりにすきなようにお話しを書いて下さい。絵の中の子どもふたりは、かりに、あなたとあなたのきょうだいとします。」

そして、6枚の図版それぞれに、次のような質問がついている。

「① 今、このふたりは、何をしているところでしょう。また、どんなことを考えているでしょう。② この絵になる少し前に、どんなことがあったでしょう。③ これからあと、ふたりはどうするでしょう。」

7枚目の白紙の図版には、次のような教示がついている。

「目をとじて、今までの絵のように、あなたとあなたのきょうだいが、何かをしているところを考えてください。(絵はかかなくてもよいです。)」

これに続く質問は、前の6枚と同様なものである。

調査は、教室において集団的に実施した。

## 3) 調査期日

昭和56年10月

### 3. 結果および考察

7枚の図版のそれぞれについての回答を、次の4つに分類した。

対立関係……ふたりのなかの一方に優位が認められず、相互に対立し、はりあっている関係。ものとりあい、つかみあい、けんか、口論など。

調和関係……きょうだいのあいだの仲の良い関係。ふたりのあいだに、親和的な雰囲気がある。認められるもの。協同の遊び、ゆずりあい、愛撫、奉仕など。

専制関係……きょうだいのどちらか一方が優位に立っている関係。一方が他方に対して、命令したり、指示を与えたり、圧迫を加えたり、あるいは独占したりすることなど。

分離関係……きょうだい相互のあいだに、積極的な交渉が認められない関係。ふたりのあいだに、関係のない遊び、傍観、無関心など。

1枚の図版に関して3つの質問がついているが、その3つの質問に対する回答を総合して、上記の4つの関係のどれかひとつに分類した。そして、4分類の占める百分率を求めた。

なお、ふたりの判定者が独立に分類を行ない、その一致率は.808であった。

Fig. 2は、全体、男女別、出生順位別におけるきょうだい関係認知の4分類を、1965年調査と本調査とを対照させてまとめたものである。Table 1は、Fig. 2に示された結果に関して、1965年調査と本調査の差について $\chi^2$ 検定した結果である。

全体として見ると、1965年調査では対立関係が最も多く、40%を占めていた。これに対して、本調査では対立関係は26%に減少している。対立関係について、1965年調査と本調査の間の差は有意であった。

調和関係は、1965年調査では27%であったが、本調査では41%であり、4分類の中で最も多くなっている。調和関係について、1965年調査と本調査の間の差は有意であった。

専制関係は、1965年調査では19%であったが、本調査では7%であり、この差は有意であった。

分離関係は、1965年調査では14%であったが、本調査では26%であり、この差は有意であった。

つまり、全体として1965年調査の結果と比較すると、本調査では、対立関係と専制関係が有意に減少し、調和関係と分離関係が有意に増加している。

	1965年調査				本調査			
	対立	調和	専制	分離	対立	調和	専制	分離
全体	40	27	19	14	26	41	7	26
	N=106				N=161			
男子	43	21	20	16	26	38	6	30
	N=56				N=77			
女子	35	34	20	11	25	44	8	23
	N=50				N=84			
長子	42	25	24	9	25	42	8	25
	N=53				N=79			
次子	38	28	14	20	26	40	7	27
	N=53				N=82			

図中の数字はパーセンテージ

Fig. 2 きょうだい関係の認知—その1—

Table 1 1965年調査と本調査の差についての $\chi^2$ 検定—その1—

				$\chi^2$	P
全 体	対 調 専 分	立 和 制 離		54.72	***
				46.86	***
				83.08	***
				44.64	***
男 子	対 調 専 分	立 和 制 離		37.44	***
				36.71	***
				60.63	***
				27.32	***
女 子	対 調 専 分	立 和 制 離		13.47	***
				11.01	***
				37.47	***
				23.11	***
長 子	対 調 専 分	立 和 制 離		36.93	***
				32.72	***
				69.92	***
				42.93	***
次 子	対 調 専 分	立 和 制 離		19.18	***
				17.40	***
				17.56	***
				7.22	**

\*\* :  $P < .01$     \*\*\* :  $P < .001$

この対立関係と専制関係の減少および調和関係と分離関係の増加という年代的变化は、男女別、出生順位別で見た場合でも同様のことがいえる。

Table 2 は、男女差について $\chi^2$ 検定した結果である。1965年調査における男女差の特

Table 2 男女差についての $\chi^2$ 検定

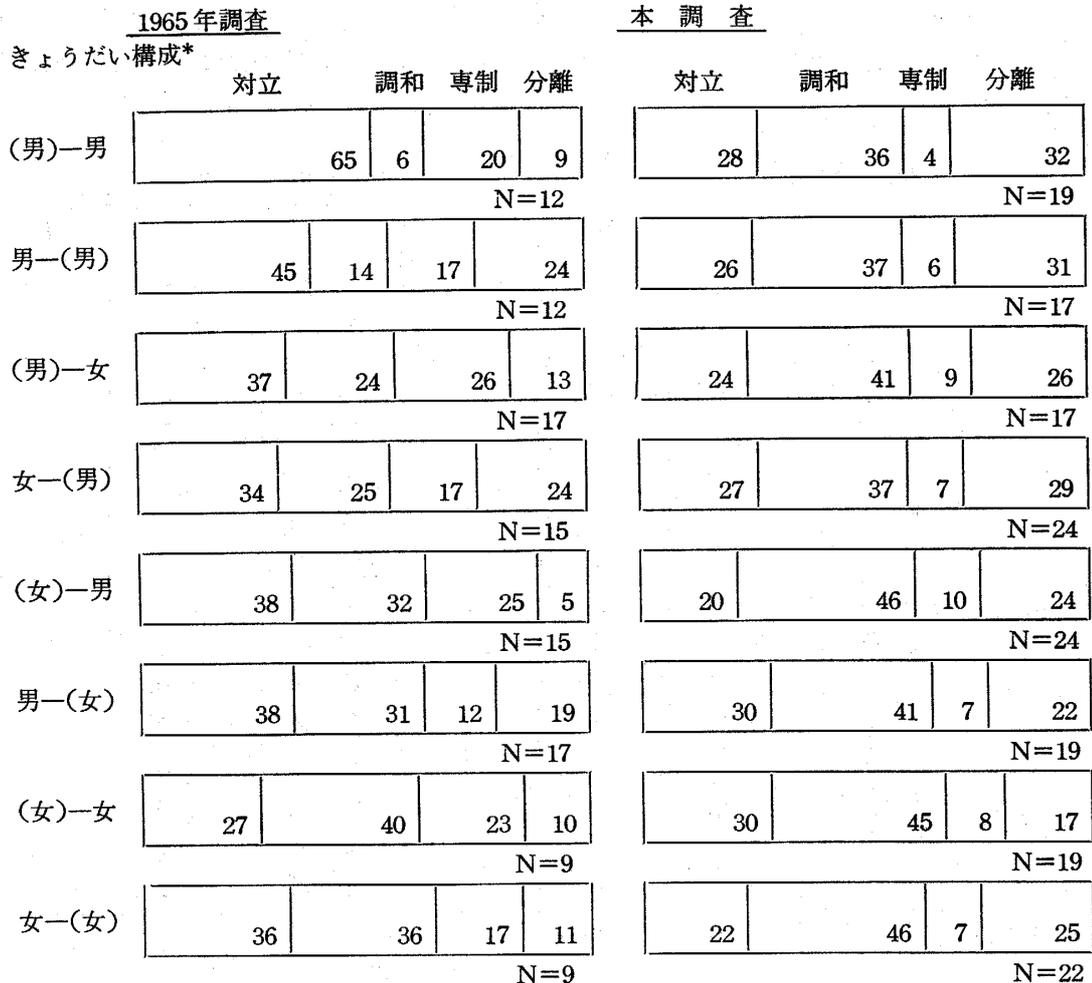
		$\chi^2$	P	
1965年調査の男女差	{	対 立	4.92	*
		調 和	16.02	***
		専 制	0.0	
		分 離	4.78	*
本調査の男女差	{	対 立	0.47	
		調 和	8.96	**
		専 制	3.72	
		分 離	14.59	***

\* :  $P < .05$     \*\* :  $P < .01$     \*\*\* :  $P < .001$

Table 3 長子と次子の差についての $\chi^2$ 検定

		$\chi^2$	P
1965年調査の長子と次子の差	対立	1.26	***
	調和	0.84	
	専制	11.99	
	分離	18.36	
本調査の長子と次子の差	対立	0.15	***
	調和	0.83	
	専制	0.66	
	分離	1.24	

\*: P<.05    \*\*: P<.01    \*\*\*: P<.001



図中の数字はパーセンテージ

Fig. 3 きょうだい関係の認知—その2—

\*: きょうだい構成について、一の左側が長子、右側が次子。たとえば(男)一男というのは、男2人きょうだいの長子のきょうだい関係認知である。

徴は、男子は女子より対立的であり、女子は男子より調和的であるということであった。これに対して本調査においては、対立関係についての男女差はなくなり、また女子が男子より調和的であるという特徴も残ってはいるものの、1965年調査より有意水準が低くなっている（1965年： $P < .001$ ，本調査： $P < .01$ ）。男子が女子より分離的であるという特徴は、本調査においてより強くなっている。

Table 3 は、長子と次子の差について  $\chi^2$  検定した結果である。1965年調査において、出生順位によるきょうだい関係認知の差の特徴は、長子はより専制的であり、次子はより分離的であるということであった。これに対して本調査においては、長子と次子の間の差がなくなっている。

Fig. 3 は、ふたりきょうだいの構成を出生順位と性によって8分類し、きょうだい関係認知についてまとめたものである。Table 4 は、Fig. 3 に示された結果に関して、1965年調査と本調査との差について  $\chi^2$  検定した結果である。Table 5 は、Fig. 3 に示された8分類のきょうだい構成のそれぞれと Fig. 2 に示された全体との間の差について  $\chi^2$  検定した結果である。

Table 4 1965年調査と本調査との差についての  $\chi^2$  検定—その2—

		$\chi^2$	P			$\chi^2$	P
(男)一男	対立	39.81	***	(女)一男	対立	13.80	***
	調和	29.33	***		調和	6.18	*
	専制	26.37	***		専制	15.41	***
	分離	18.84	***		分離	18.65	***
男一(男)	対立	10.68	**	男一(女)	対立	2.48	
	調和	15.40	***		調和	3.41	
	専制	9.06	**		専制	2.24	
	分離	1.42			分離	0.40	
(男)一女	対立	5.32	*	(女)一女	対立	0.23	
	調和	8.46	**		調和	0.32	
	専制	18.92	***		専制	11.46	***
	分離	8.48	**		分離	2.50	
女一(男)	対立	2.21		女一(女)	対立	5.58	*
	調和	5.50	*		調和	1.36	
	専制	10.06	***		専制	4.56	**
	分離	1.14			分離	6.21	*

\*:  $P < .05$     \*\*:  $P < .01$     \*\*\*:  $P < .001$

きょうだい構成を8分類した場合においても、対立関係と専制関係の減少および調和関係と分離関係の増加という年代的变化の傾向が全体として見られた。また、1965年調査において見られたきょうだい構成の違いによるきょうだい関係認知の差が、本調査におい

Table 5 8分類のきょうだい構成それぞれと全体との差についての $\chi^2$ 検定

		1965年調査		本調査	
		$\chi^2$	P	$\chi^2$	P
(男)一男	対立	18.17	***	0.34	
	調和	16.33	***	1.70	
	専制	0.15		5.74	*
	分離	2.44		5.03	*
男一(男)	対立	0.85		0.01	
	調和	5.34	*	1.16	
	専制	0.44		0.67	
	分離	4.93	*	2.52	
(男)一女	対立	0.40		0.04	
	調和	0.10		0.10	
	専制	2.55		0.70	
	分離	0.32		0.00	
女一(男)	対立	1.27		0.16	
	調和	0.05		1.74	
	専制	0.38		0.10	
	分離	5.95	*	1.60	
(女)一男	対立	0.14		4.78	*
	調和	2.08		3.18	+
	専制	1.47		2.59	
	分離	7.63	**	0.68	
男一(女)	対立	0.21		1.89	
	調和	1.51		0.00	
	専制	4.24	*	0.01	
	分離	1.81		1.74	
(女)一女	対立	4.15	*	2.27	
	調和	5.75	*	0.67	
	専制	0.62		0.61	
	分離	1.21		8.60	**
女一(女)	対立	0.30		1.63	
	調和	3.45	+	1.36	
	専制	0.54		0.01	
	分離	0.56		0.01	

+: P&lt;.10 \* : P&lt;.05 \*\* : P&lt;.01 \*\*\* : P&lt;.001

ては少なくなり、いずれのきょうだい構成においても、類似したきょうだい関係認知をするようになってきている。すなわち、1965年調査においては、きょうだい構成によって、きょうだい関係認知の4分類の順位に違いが見られたが、本調査においては、いずれのきょうだい構成においても、まず調和関係が最も多く、次に対立関係と分離関係がほぼ同程度で続き、専制関係はかなり少ないというパターンになっている。

Fig. 4 は、年齢間隔3年以上(年齢差・大)と3年未満(年齢差・小)とで分け、出生

		1965年調査				本調査			
		対立	調和	専制	分離	対立	調和	専制	分離
年齢間隔 3年以上	長子	37	36	21	6	22	46	7	25
	次子	42	29	15	14	25	45	6	24
		N=16				N=41			
年齢間隔 3年未満	長子	54	15	22	9	29	38	9	24
	次子	30	30	14	26	27	36	7	30
		N=15				N=45			

図中の数字はパーセンテージ

Fig. 4 きょうだい関係の認知—その3—

Table 6 長子と次子の差についての $\chi^2$ 検定—その2—

		年齢間隔3年以上		年齢間隔3年未満	
		$\chi^2$	P	$\chi^2$	P
1965年調査の長子と次子の差	対・立	0.67		12.19	***
	調和	1.31		6.91	**
	専制	1.46		2.66	
	分離	3.92	*	10.86	***
本調査の長子と次子の差	対立	1.33		0.57	
	調和	0.08		0.39	
	専制	0.14		0.70	
	分離	0.34		3.77	+

+: P<.10 \*\* : P<.01 \*\*\* : P<.001

順位別のきょうだい関係認知をまとめたものである。Table 6 は、Fig. 4 に示された結果に関して、長子と次子の差について  $\chi^2$  検定した結果である。

1965年調査においては、年齢差の小さい場合に、長子と次子の間の差が明確にあり、長子はより対立的、非調和的であるのに対して、次子はより分離的であるという特徴があった。これに対して本調査においては、いずれも類似したきょうだい関係認知をするようになり、年齢間隔のひらきによる特徴が見られなくなっている。

以上の結果を全体としてまとめると次のようにいえる。男女、長子次子にかかわらず、年代的变化の全体的特徴は、対立関係と専制関係の減少および調和関係と分離関係の増加である。男女差、出生順位による差、年齢間隔による差がなくなり、いずれのきょうだい構成においても類似したきょうだい関係認知をするようになっている。男子が女子のもつ特徴（調和が多く、対立が少ない）に近づいているともいえる。いずれのきょうだい構成においても調和関係が最も多く、きょうだい関係の基本は対立であるというかつての特徴はなくなってきた。

対立関係、専制関係の減少ということは、家族内の対人関係の民主化ということを反映している面もあるであろう。しかし、調和関係の増加と同時に、分離関係も増加しているというようなことを含めての全体的結果から感じられるのは、人間関係の葛藤を基礎としないひどく外面的・表面的な親和であり、希薄なきょうだい関係である。真の親和的な人間関係は、対立的な人間関係や専制的な人間関係など様々な人間関係の経験を通じて生じるものであろう。たて関係とよこ関係をつなぐななめの人間関係としてのきょうだい関係が希薄であるということは、より一般的な人間関係も希薄になりつつあるのではないかということが予想される。このような希薄なきょうだい関係が何によって生じてくるのかについては、親（および他の大人）の養育態度や物質的環境などとの関係ということが考えられる。たとえば、母親や幼稚園でのしつけがとにかく争いごとを避けるという方向でなされる傾向があるのではないか、というようなことが考えられる。また、生活が豊かになると、きょうだいのそれぞれが別々の部屋で別々のことを行ない、別々のおもちゃをもっているため、ひとつのおもちゃを2人で奪いあうというようなことがなくなりうる。つまり、きょうだい間の相互作用そのものが減少しているのかもしれない。こういった点については、さらに実証的な資料をもとに考察が進められなければならないであろう。

#### 引用・参考文献

- 1) 加藤義明：親子関係ときょうだい関係。ふたりっ子の生育環境，依田 明・福島章（編）ふたりっ子家族の親離れ・子離れ，有斐閣新書，1981。
- 2) 依田 明：きょうだいの性構成ときょうだい関係，教育心理学会第7回総会発表論文集，1965。
- 3) 依田 明：ひとりっ子・すえっ子，大日本図書，1967。
- 4) 依田 明：家族関係の心理，有斐閣新書，1978。
- 5) 依田 新：家族の心理，培風館，1958。